

私の戦争体験記

——日米開戦から日本敗戦まで——

小島 辰雄

本町六丁目

昭和二〇年二月二四日頃だったと思うが、東京一帯に雪が降り積もった。その晩、私は学徒動員で派遣されていた蒲田の飛行機工場で宿直勤務を命じられ、翌朝、神田美土代町のYMC A裏の下宿に帰って来た。前夜は宿直で寝ていなかったため、木造住宅の二階にあった下宿の万年床に潜り込んでいた。やがて米軍機が近づいて来るのか空襲警報が鳴り渡った。

それまで米軍機の空襲は大したことはなかったので、横着を決め込んで、そのまま布団を被っていた。そのうち爆音が聞こえたと思ったら下宿の近くでドカーンと凄いい音がして爆弾が破裂した。「コイツァ物騒だ。グズグズしてたら命はないぞ！」と早速寢床を飛び出し、学生服に着替えて屋外に出た。下宿の前に防空壕らしいものがあつたが、昨夜来の雪が一部溶けて防空壕の内部は水浸し。

屋外に出て四、五分、ヒョイときつきまで私が寝ていた下宿の部屋を見上げて驚いた。ガラス窓越しに部屋の中が赤々と燃えているのが見えた。直ぐ自分の部屋がある二階へと階段を駆

け上がった。そこで見たのは、屋根瓦と天井板を突き破った焼夷弾が、さつきまで私が寝ていた布団のド真ん中に突き刺さっていて、襖も衣類も家具も一斉に燃えていた。火を消したくてもバケツはなし、二階だから水道は遠い。火勢は見えているうちに強まるばかりで手のほどこし様がなく、消火を諦めてしまった。

爆弾の破裂音に驚いて逃げ出さないうで寝ていたら、布団の上からズブリッと焼夷弾を食らって、私の命は無事だったかどうか。空襲を受けた日は雪が降った翌日で、朝から晴れていたのに焼夷弾で燃え盛る家々の煙が空に充滿して段々暗くなり、真昼間なのにまるで日没後の様に暗くなってしまった。

この件から約一年前、私が二年生に進級し登校した最初の日、学部長からの談話があつた。「諸君は理工学部 of 学生だから戦場にも送られず学業に専念できた。だが、今や日本の現状は非常時そのものだ。普通なら丸一年かけて学ぶ授業を四か月でやってしまう事に決定した」という内容だった。それ故、四月から

の授業は、朝八時から午後五時迄昼食時を除いて実施され、製図の実習の時は深夜にまで教室に残って頑張った。

十九年九月から学徒勤労動員とかで、蒲田の飛行機製作所へ毎日通った。学業から引き離されて気分転換を兼ねて十一月の連休を利用し、我等学生だけで雲取山に登山しようと決めた。二〇歳前後の若者ばかりだったので、「雲取山なんてヘイチャラさ」と皆考えていた様だ。奥多摩まで国鉄で行き、その先は道なき道も踏み分けて進んだ。私は五、六百メートル級の山なら方々登った経験はあった。

雲取山は東京都、埼玉県、山梨県の境に聳^{そび}える二千メートルを越える手強い山だった。奥多摩駅から半分も行かないうちに雨が降り出した。日も暮れて山路が段々見えなくなり、やがてドシャ降りになった。進むことも戻ることもままならない状況が続いた。十数名の仲間のうち懐中電燈は一個だけ、それが手動発電のヤツだから手を休めると暗闇になってしまう。それでも滑りつ転びつ進んだ。その内、一人二人とバテる者が出た。

まだ達者な奴が仲間のリュックを担ぎ、背後から坂道を押しあげた。ズブ濡れになって山小屋に辿りついた時は深夜になっていた。殆どの仲間が登山の経験もなく無謀なものだったが、全員が互いに声を掛け合い懸命に助け合ったので、一人の落伍者も出さなかった。この雲取山登山後は、我ら学生同志の親しみと信頼は数倍にも増した。苦勞を共にして助け合う事が如何に

大切な事であるかを学んだ様な気がした。

この時一緒に登った学生が、空襲で丸焼けになった私に布団一式をプレゼントしてくれた。当時東京中の店を探しても布団を買えない時代だったから本当に有難かった。彼は長野県出身で、母親が世田谷区に一軒家を借りて親子で住んでいた。私は母親がわざわざついて来て面倒を見てると聞いた時はビックリした。今様「教育ママ」のハシリだったのだろう。我らは軍隊への入営を猶予されていたが、私より年長者だった彼に入営通知が来た。彼の教育ママの落胆は酷^{むご}かったが、軍からの入営通知に対しては我らの手におえない。

神田の下宿を焼かれて品川区の大井町で下宿を見つけて移り住んだ。大井町でも、夜間B 29の爆撃があった。この辺には防空壕が全く無かったので、部屋の電灯を消して二階の窓からB 29の編隊が爆弾を落としながら頭上を飛び去るのを見物した。

それこそ命がけの高見の見物だった。この夜の爆撃は焼夷弾は少なくて、破壊専門の爆弾がシャーッと落下音と共に降ってきた。我が下宿には落ちなかったが、爆弾が破裂する度にズシン、ズシンと振動が腹に響き、床も窓ガラスもガタガタと揺れて、やがて土砂がザザアッと降ってきた。

翌朝、爆弾が落とされた所を見に行った。民家が跡形もなく吹っ飛んで巨大な穴がアチコチにできていた。五百キロや一トン爆弾を落とされたんだろうと思った。

私が空襲の時経験したのは、警報が発令され敵機が刻々接近して来る時、何時も身震いを覚えた。命の危険を感じる為だったろう。それから暫くすると気持ちが落ちついて来た。多分「成る様に成るさ」と観念して、冀度胸が座ってくる為だったろう。

飛行機工場で当直していた晩、空襲警報が発令された。成人男子の多くが軍隊に行ってしまったので女子従業員が多いので、我ら学生に当直を頼まれていたから当直することが多かった。B29が大編隊で襲って来た。工場一帯にも焼夷弾の雨が降って来た。当直していたのは我ら学生が数名だけだったが、工場内に落ちた焼夷弾が火を吹くのを必死で消して回った。遂には全部消し止めた。しかし、工場のまわりの民家は皆燃えてしまっていた。

空襲の日から幾日か過ぎた日、火を消し止めた我ら学生は朝礼の時全従業員の前に整列させられ、工場長から「諸君の活躍で工場は焼夷弾の火から守られた。全従業員と共に御礼を申し上げる」として表彰され、褒美にステブルファイバ製の服を貰った。

この空襲の翌朝、下宿へ帰って一眠りしようと工場を出た。京浜急行は空襲で送電線をやられて不通なので、京浜国道に出てバスを待つ。やっと東京方面行きのバスに乗って行くうち、後方の乗客が騒ぎ出した。米軍の艦載機がバスを追って迫って来るという。一回目の機銃掃射は無事だったが、反転してやっ

てくる。大急ぎでバスを降りて溝に飛び込んだ。米機は無抵抗なバスをゲームでも楽しむ様に面白半分に撃ちまくって来た様に思える。

昭和十六年十二月、日本軍がハワイ真珠湾を攻撃し、米軍の艦船に大損害を与え戦争が始まった。その頃、私は都下清瀬村の清戸学園に居た。新聞を見ない、ラジオを聞かない生活だったので、外界のニュースには疎かった。

学園で老後を送っていたエミール・ヘック先生が「小島、日本は大変な戦争を始めたよ。今は勝ったと思ってるが、その内日本は戦争に負けるよ」とおっしゃる。理由を聞くと「日本は一時的には勝つだろうが、最後の勝利を得るには物凄い物量が必要だ。日本には石油も石炭も鉄などの金属もアメリカに比べて足りないものばかりだ。『大和魂』だけでは戦争に勝てないんだ」と言われた。

私は九段の旧制中学を出たばかりで世情には疎かったが、「日本は物量で戦争に負ける」という先生の言葉が深く心に残った。ヘック先生はフランス人で、祖国を愛し、日本と日本人を愛しておられた。学園では我らにフランス語の聖書の講義を楽しくして下さった。若い時は東京帝大でフランス文学を講義し、日本のフランス文学者を育てた功労者でもあった。カトリックの神父だったから生涯妻帯せず、今は日本の土になっておられる。

私が学徒勤労動員で派遣された飛行機工場では、技術部の試験課に配属された。昭和十九年だったが、飛行機を造るのに金属類が不足してしまったのか、機体の一部とはいえ材木を使うという。この工場では垂直尾翼と水平尾翼を造る。その為材木の材料試験をするのが我らの任務だった。それだから材木の小片を機械で圧縮したり、引っ張ったり、捻^{ねじ}ったりしてデータを出す。今の様に便利な計算機がない時代だったから、タイガー計算機をガリガリまわしながら計算した。時には東大の航空研究所に一月も行かされて計算を手伝った。

日本敗戦後、友人に「俺らは木製飛行機造りの手伝いをしていた」と話すと「嘘だろう」と笑われてしまった。

勤労動員で工場に行つてて我らに対して「登校せよ」との連絡が来た。登校したら「講堂に集まれ」と言う。講堂で学校教練の責任者だった陸軍大佐の話があった。老大佐殿は最近の日米の戦局の事に触れた後、次の様に話された。「米軍が日本本土に上陸するのは間もないだろう。やがて君らが軍隊に召集されて銃を持たされたとしても、君らには銃弾は一発しか与えられない。敵と遭遇しても弾を撃つてはならん。先ず銃剣で敵兵を突け。それから弾を撃ち込め」と言われた。その時は敵と戦うのに弾を一発しか与えられないという意味が分からなかった。日本降伏直前、私にも入営通知が来て機関銃中隊に配属され、毎日米軍艦載機の襲撃を受けた。味方は次々に死傷者を出した。

「屍衛兵勤務」をした時、兵士の死体を入れた棺の山を見た。空襲の度に敵機に備えて機関銃を構え弾を待ったが、待つても待つても弾は支給されなかった。日本敗戦の日まで一発の弾も見なかった。

日本が連合国を相手に戦争を始めた時、ヘック先生から「小島、日本は物量の不足で戦争には負けるよ」といわれた言葉が思い出された。